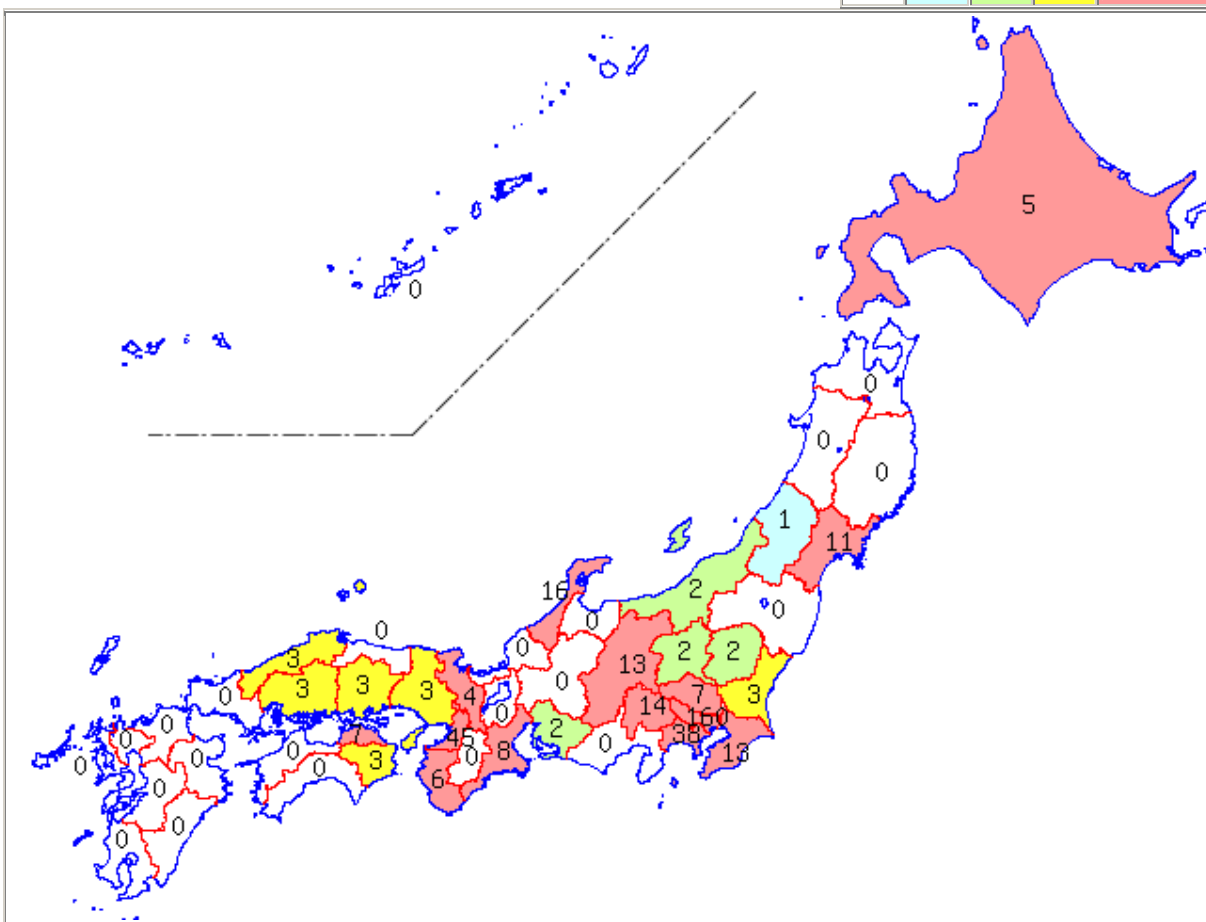


麻疹について

1. 麻疹の流行状況

2007/02/17 より 2007/05/17 までに 374 人が発症しました。

報告件数と背景色				
0件	1件	2件	3件	4件以上



国立感染症研究所感染症情報センター

大学が、次々、休学になっています。20歳～24歳、20歳未満が感染しやすいと言われています。

2. 麻疹のワクチンを接種したのに、麻疹に罹る？

麻疹ワクチンの接種による抗体陽転率は95～98%で、ほとんどが抗体を獲得しますが、数%は抗体ができない場合があります。その原因は色々考えられますが1つの原因として、感冒等のウイルス感染症に罹った場合、インターフェロンのようなウイルスの増殖を抑える物質が血液中に含まれます。そのような時に麻疹ワクチンの接種を受けるとワクチンウイルスの増殖が妨げられ(いわゆる primary vaccine failure)、抗体ができない場合があります。この様に麻疹ワクチンを接種しても抗体を獲得できない場合もあるので麻疹の流行期には麻疹に罹ってしまうことがあります。

以前には麻疹、おたふくかぜ、風疹等のウイルス感染症は1度罹ると2度は罹らない終生免疫が獲得されると考えられ、生ワクチン接種の場合も同様に免疫は終生続くと考えられていました。しかし、近年、麻疹の流行が減少して野生ウイルスに接触する機会が少なくなってきましたので、麻疹ワクチン接種による免疫が低下して麻疹に罹ってしまう例(secondary vaccine failure)が増えています。この為、平成18年6月1日より麻疹・風疹ワクチンの接種が2回に改正されました

3. 麻疹に感染したと思われるときの予防接種は？

今まで麻疹に罹ったことのない子どもが麻疹に罹っている子どもと遊んだり、兄弟のうち一人が麻疹に罹っている時は、ほぼ感染してしまいます。

麻疹に罹っている子どもなどと遊んだ時期がはっきりしている場合には、72時間以内にワクチンを接種すると自然麻疹の発症を防ぐことが可能なこともあるといわれています。しかし、兄弟等が麻疹と診断された場合は、診断された時に未感染の兄弟には既に感染して72時間以上過ぎていることが多いので、ワクチン接種は間に合わないことが少なくありません。

このような場合には、ガンマグロブリンの筋注で発症を防いだり、軽症化させることができます。この予防効果は一時的なものです。ガンマグロブリン筋注後、3ヶ月以上経過した後にワクチンを接種することが必要です。またガンマグロブリンを使用する時はヒト血液製剤であるという認識のもとに使用すべきです。

4. 麻疹はどんな病気？

鼻やのどの粘膜に麻疹ウイルスが付着、侵入し増殖を始めることによって麻疹の感染が始まります。潜伏期間は、10-12日(7-14日のこともあります)です。前兆症状は、2-4日(1-7日のこともあります)続きます。前兆症状としては、発熱とともに咳や鼻水が出始め、結膜炎を伴うこともあります。熱は38度程度に達しますがやがて下がります。また、麻疹に特徴的なコプリック斑が、前兆症状が始まってから2-4日後に、頬の内側の口腔粘膜に出現します。コプリック斑は粘膜にまかれた少量の白砂のように見え、周囲の粘膜は赤くなっています。コプリック斑が出現してから1-2日後に発疹が出現し始め、発疹が出現すると1-2日でコプリック斑は消えてきます。

麻疹の発疹は、発疹が出る前の前兆症状が出現してから3-5日後に、出現します。赤い斑状丘疹で、通常5-6日は出現しています。髪の毛の生え際の、耳の前や下、首の脇にまず出現し、顔や上頸部に広がり、24-48時間かけて体幹部や四肢へと広がります。赤い斑状丘疹は不連続ですが、とくに上半身では多くは癒合して、顔が一面真っ赤になることもあります。発疹が出て来ると一度下がっていたものが再び発熱し40度に達することもある高熱が出ますが、3-5日の内に熱は下がり、発疹は出現したのと同じ順序で消えていきます。発疹の跡にはしばらく銅褐色の変色が残りますが、これもやがて消えます。

麻疹の合併症は、5歳未満の乳幼児と20歳以上の大人で起こる確率が高いです。

1985-1992年のアメリカ合衆国のサーベイランス・データによれば、麻疹報告例の、8%で下痢が見られ、7%で中耳炎(こどもで多い)が見られ、6%で肺炎(死因となることもある)が見られました。また、急性の脳炎が0.1%で見られ、発疹出現後の平均6日後(1-15日後のこともあり)に発熱、頭痛、嘔吐、首が固くなる、傾眠、痙攣、昏睡等の症状で出現しました。脳炎となった場合の致死率は15%、何らかの神経学的な障害が残った者25%でした。

妊娠中に母親が麻疹にかかると、早産、自然流産、低体重児出産の確率を高めます。但し、麻疹が原因の先天奇形はまれとされています。

5. 麻疹の病原体は？

病原体は、パラミキソウイルスに属する麻疹ウイルスです。牛痘や犬のディステンパーといった病気の病原体のウイルスたちが近縁のウイルスです。ウイルスの大きさは、200ナノ・メートルほどです。麻疹ウイルスは、熱、光、酸などによって不活化されやすいです。空中や、ものの表面では数時間でかなりの部分が不活化します。そこで、ものの表面についた麻疹ウイルスを手を介して口や鼻に運ぶよりは、患者が咳をして生じた飛沫を吸い込んで感染してしまう場合の方が多いとされています。麻疹患者が在室して咳をしていた部屋では2時間後位までは、感染力のある飛沫が空中を漂っている可能性があります。患者から他の人に感染する力は強く、患者の身近の麻疹の免疫のない人は90%以上の確率で感染すると言われていています。前兆症状が始まってから、発疹出現の4日後位までの間、麻疹ウイルスは、患者の鼻やのどから出てきます。そこで、麻疹は、発疹出現の4日前位から、発疹出現の4日後位までの間に患者から他の人にうつります。

6. 予防のためには・・・

麻疹にかかった人は、学校や職場を休んで、通院以外の外出を控えましょう。学校保健法での登校基準は「発疹に伴う発熱が解熱した後3日を経過するまで出席停止とする。ただし、病状により伝染のおそれがないと認められたときはこの限りではない。」となっています。

よく手を洗うことは、ものの表面についた麻疹ウイルスを手を介して口や鼻に運ぶことを防ぐために役立ちます。

麻疹に罹っている人は、マスクをし飛沫が飛ばないように注意しましょう。(麻疹は空気感染です)